13日　木曜

ヨハネ

20:24 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。
20:25 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。
20:26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。
20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」
20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」
20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」
20:30 イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。
20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

トマスは信仰の仲間と一緒に行動していませんでした。また「主を見た」という仲間の証言を聞いたにも関わらず、それを信じませんでしたし、本当かどうか調べることもなかったのです。ただ、自分は信じないと初めから決めていたようです。

もちろん何でもかんでも人の言うことを信じていたら、だまされることもありますし、周囲に流されるだけで、結果的には意見をころころ変えることになるでしょう。信じるとは、主のみことばを信じるということです。聖書のみことばによれば、主はよみがえるのであり、また主イエスご自身がよみがえりについて語っておられたのです。

また信じるとは信仰の証言を受け入れるということです。クリスチャンは共に交わり、分かち合い祈りあうというすばらしい特権があります。それには相手を尊重して受け入れるところから始まるのです。しかしトマスは兄弟姉妹の証しを受け入れませんでした。

トマスは復活には懐疑的ではありましたが、反面的に簡単に信じ込んでいることがありました。それは神でも死には勝てないということでした。なので彼にとっては、復活を調べる必要もなかったのです。彼は信じやすい性格だったのです。そしてだまされ易い性格だったのです。それはサタンにです。

自分はだまされないぞと、懐疑的であることが論理的であるかのように錯覚しがちですが、それは不信仰を信じ込んでいるだけなのです。クリスチャンも同様で、神様のことばをもっと本気で信じるべきです。

この福音書も含めて「書かれたのは」、「信じていのちを…得るため」だからです。聖書を本気で信じましょう。適当に聞き流すことのないようにしましょう。

Bible Reference 聖書の記述

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？